



読書の秋・デジタルの秋

校長 田邊 雅也

電子図書の利用が全国トップレベル

「利用が全国トップレベルです。」と、ポプラ社の方からうれしい報告をいただきました。電子図書MottoSokka!を利用して1年半となります。紙媒体ではありませんが、読書を身近に感じている子がたくさんいて、保護者からも肯定的な声をたくさんいただいています。

「文化庁 平成30年度 国語に関する世論調査」によると、1ヶ月に1冊も本を読まない割合は47.3%でほぼ半数です。また、読書が必要な年代は「9歳以下」が18.8%（3位）、「10歳代」が40.7%（1位）と、約6割の方が、小中高生の時期に読書が必要だと感じています。また、「年齢に関係なくいつでも」が21.8%（2位）と高い割合です。何歳になっても、知識や教養、技能を身につけ、アップデートし続ける必要がある、ということなのでしょう。

読書は、情報選択能力を高め、生きる力を身に付けさせる

漢字や文法に詳しくなり、知識・教養が増える。本の内容の疑似体験で想像力が鍛えられる。関心や興味の幅が広がり、新しい世界へ踏み出すきっかけになる。新たな発見を得ることで視野を広げ、今後役に立つ情報を得ることができる。考える力がつき、自分の中に蓄積された知識がアイデアとして活かされる。このように読書の効果はたくさん報告されています。

スマートフォンやインターネットで情報を大量に集めるスキルがあっても、読書経験の豊富な方が取捨選択した情報の質は、非常に高いです。電子図書であっても、子供の読書習慣の定着は、情報の取捨選択の観点からも、とても重要です。加えて、1冊の本には、著者の長年にわたる教養や教訓があり、多様なものの見方や考え方、そして生きる力をも身につけられます。

デジタル・ネイティブの子供たちに何ができるのか

MottoSokka!の開発チームの方が授業視察した際（学校だより夏休み号参照）に、子供たちがデジタル・ネイティブである様子に驚いていました。今の子供たちは、生まれながらにデジタルの環境が整い、利活用が当たり前となり、学校でもiPadを文房具のように使っています。

情報モラルの観点から、ネットトラブルやネットいじめにつながるのを禁止にしてほしい、という考えがあります。子供がよくないサイトにアクセスしたり、夜遅くまで起きたりしていることを親が制御できないことが一つの理由に挙げられます。確かに学校で行動の自制を促すことも時には必要です。しかし、学校と保護者が管理的な指導ばかりをしていて、将来を見据えたデジタル・ネイティブの子供たちを育成することができるのでしょうか。

デジタル・シティズンシップ教育 ※

今、デジタル・シティズンシップ教育が求められています。デジタル社会における「善き社会の担い手」を育てる教育です。子供であっても、倫理的、文化的、社会的問題を理解し、責任を持って、ポジティブにデジタルを利活用させるための教育です。ネットいじめやネットトラブルを引き起こさないような行動はもちろん、デジタルで創作したものを通して、大勢の人に喜びを与える創造的な活動もこれに含まれます。

こうしたデジタルでの行動と創造を通し、多くの人にウェルビーイングを与えるようなデジタル・ネイティブの育成が、これからの社会の役目です。OECD Learning Compass2030にも通じます。欧米では当たり前の教育になっていますが、日本はやや消極的な印象は否めません。

埼玉県教育委員会から「児童・生徒自身によるネット利用ルールづくり活動」の依頼を受けています。現在、ICT委員会の児童を中心に自作アンケートで、傾向を把握した上で、児童全員が、「マイルール」を考える取組です。ICTの利活用に自律した行動変容を目指しています。

「マイルール」で善きデジタル社会の担い手に

「読書の秋」の中、読書する雰囲気が高まっているところではありますが、「デジタルの秋」を加えてはいかがでしょうか。ICT委員会の子供たちの発案で、お子さん自身が考えたネット利用に関する「マイルール」について、ご家庭で相談する計画があります。その際、デジタルに対しても自律できる子供、つまり、デジタル社会の善き担い手となれるようなお声かけと見守りをお願いします。こうした地域社会づくりについても、学校運営協議会でも協議しています。

※デジタル・シティズンシップ教育 欧州評議会（2020）Digital Citizenship Education Trainers' Pack（文科省HPより引用）

デジタル・シティズンシップ教育は、新しいテクノロジーがもたらす機会を考慮し、情報に基づいた選択ができるようになることを目的としています。若者がインターネットのリスクや落とし穴から身を守るだけでなく、有能なシティズンとして社会のためにデジタル技術を積極活用する方法を理解させ、能力習得を支援する重要な役割があり、テクノロジーの格差を是正します。